

研究課題名	県内産堆肥に含まれる微量成分等の調査		
予算区分	県単 (631千円)	担 当	経営技術研究室 環境研究グループ
研究期間	新規 (令和3年度)	協力関係	農業研究所 環境研究室
研究目的	<p>県内の農業生産の現場では、化学肥料の価格高騰による生産コストの上昇や堆肥等の有機質資材の投入不足による地力低下、土壌中肥料成分のアンバランス化が問題となっている。一方で、良質な土づくり資材である堆肥は、農業者の高齢化による散布労力不足等により利用が進んでいない。化成肥料の原料のほぼ全量を輸入に頼る我が国にとって、国内で安定的に生産される肥料資源である堆肥の利用促進は、持続的な循環型社会の実現を進めていく上でも極めて貴重である。</p> <p>こうした状況を受け、令和元年度の肥料法の改正により、堆肥の販売にあたって従来認められていなかった窒素全量・りん酸全量・加里全量以外の肥料成分の表示が可能となった。</p> <p>そこで、堆肥の利用拡大に向けた基礎的な知見を得ることを目的として、現在県内で生産・販売されている堆肥について、法改正により新たに表示が可能となる微量成分等を調査する。</p>		
全体計画	1 県内産堆肥に含まれる微量成分等の調査		
研究対象	全畜種	専門部門	畜産環境
<p>○ 本年度試験のねらい</p> <p>県内で生産・販売されている堆肥に含まれる微量成分等の把握。</p> <p>試験1 県内産堆肥に含まれる微量成分等の調査 (時期) 令和3年4月～令和4年1月 (試験の内容) 県内の大規模堆肥センター等で生産・販売される堆肥中の石灰、苦土、けい酸、マンガン、ほう素等の含有量を調査する。</p> <p>○ 既往の関連成果</p> <p>1 近赤外分光法による堆肥中肥料成分の簡易診断技術を確立するために、県内で生産された牛ふんまたは鶏ふんを主原料とする堆肥のべ227点を用いて、旧肥料取締法で表示が認められていなかった石灰全量、苦土全量、アンモニア性窒素及び硝酸性窒素等を分析した(水木ら(2012))。</p> <p>2 全国で生産された家畜ふん堆肥1,502点から重金属である銅全量及び亜鉛全量を分析した((財)畜産環境整備機構 堆肥の品質実態調査報告書(2005))。</p> <p>○ 協力関係・分担</p> <p>農業研究所 環境研究室：微量成分等の分析の指導。</p>			

県内産堆肥に含まれる微量成分等の調査 (R3)

背景・目的

〔県内農耕地土壌の実態〕

- ・ 土壌中の**肥料成分のアンバランス化**
- ・ 堆肥などの有機質資材の投入が減って**地力が低下**



令和元年度の肥料法の改正に伴い、堆肥に含まれる窒素全量・りん酸全量・加里全量以外の肥料成分の表示が可能に！

堆肥を土壌改良資材としてだけでなく、肥料として有効活用する機運が高まっている！



試験の内容

- ・ 県内大規模堆肥センター等で生産・販売されている堆肥の肥料成分の含有量を詳細に調査する。

期待される効果

①肥料としての堆肥の適正利用の推進

- ・ これまで活用されていなかった堆肥中の石灰・苦土のほか、各種微量成分を考慮した適切な肥料設計が可能となり、土壌中の肥料成分バランスの改善につながる。

→ 詳細な成分表示で耕種農家が安心して堆肥を利用できるように！

②新しい肥料への原料利用の拡大

- ・ 新たに公定規格が設けられた「指定混合肥料」等の原料として、堆肥の需要が増える可能性あり。

→ 堆肥の利用拡大と県内農耕地土壌の土づくりの促進！！

